



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

平和を願い、祈る力

げんしばくだんがおちると

ひるがよるになって

人はおぼけになる 小学3年 坂本はつみ

この詩は、坂本はつみさんが小学校3年生の時に書いた詩です。

原子爆弾が落ちた、その時のことを想像してください。考えてください。

なぜひるがよるになったのか、なぜ人がおぼけになったのか……。

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の朗読ボランティアによる「被爆体験記・原爆詩の朗読会」。子どもたちへ語りかけられたことばである。どの子どもも真剣に聞き入っていた。ボランティアの方が語ってくださる一言、一言を、うなずきながら受け止め、大事だと感じたことばを書きとめ、場面を想像しようと目を閉じて聞き入っていた。

その後、平和記念資料館を見学した。悲惨な当時の状況を伝える展示物に出会うと、誰もが、命ということ、人々は平和を求めてやまないこと、争いは決して起こしてはならないことなど、日頃は気にも留めず、見過ごしてきていることに向き直らざるを得なくなるようだ。静かに見入っている多くの一般来館者に混じり、子どもたちは一つひとつの展示品を丁寧に見て回り、解説されている一語一語を確かめるように書きとめていった。

広島の平和公園は、平和を求め、世界中からの訪問客を受け入れている。その数は年間110万人を超えるのだそうだ。修学旅行生は、約30万人とのこと。公園内を歩いていると、さまざまな言語がとびかっている。異なる言葉がざわめく不思議な場所だが、過ちは二度とくりかえされないように……この願いは一つとなっている。ボランティアガイドさんから、「みんなは英語を学び始めているはず。だから、この広島の願いをぜひ、英語で伝えていって欲しいんです。」と語りかけられ、こっくりとうなずき応える子どもたちだった。

平和セレモニーをする私たち矢倉小の団を、外国の方たちは、はじめのうちは、ものめずらしそうにぐるりと取り囲み、見守っていた。が、「黙祷」ということばを受けて祈る子どもたちと一緒に、外国の方たちも頭を下げる、そんな一幕があった。

一ヶ月くらい前、修学旅行に向けての平和学習は、それほど意欲的でもなく、どちらかといえ、持ち物やグループ分けなどに関心が寄せられていたように感じられた。当然のことであり、一度きりの修学旅行なのだから、子どもたちにとってはとても大切なことだ。

しかし、いざ現地に自身の足で立ち合い、本物の事物に向き合いながら広島の声に耳をすますと、自然と心が一つの方向に流れ出す。記念公園全体を包み込むような平和を願い、祈る力がそのようにさせたのだろう。かけがえのない学びができた修学旅行となった。

校長 大林 道範